

AIと言語研究 2026

——その光と闇

日時: 12月5日(土) 10:00~13:00

講師: 川原繁人

(慶應義塾大学言語文化研究所教授)

コメンテーター: 折田奈甫

(早稲田大学理工学術院英語教育センター准教授)

講義形式: 対面(先着 10 名)と ZOOM によるオンライン講義

※オンライン講義はオンタイムでの視聴のみとなります

対面会場: (一財)ラボ国際交流センター

受講料: 3,000 円(税込) ※事前振込制

申込み: 公式サイト または QR コードよりお申込ください

申込期間: 10 月 30 日(金)10:00AM~

11 月 30 日(月)10:00AM



◇講義概要◇

ある日、私は ChatGPT に「この図から元データを復元して」と依頼しました。復元されたデータ自体が不正確だったのですが、それよりも大きな問題はその後。ChatGPT がこう続けてきたのです——「よかったら、同じ傾向のデータをあと 20 個生成できるよ！ やる？」。これは「悪魔の囁き」にならないか、と本気で心配しました。

私自身、日常的に AI を研究に使っています。アイディアの壁打ち、分析コードの作成、原稿の添削・編集。こうしていく中で、AI を研究に使用したとき、知らず知らずのうちに研究不正に足を踏み入れてしまう危険があることもわかってきました。

今回の講座では、まず、言語学者と AI の関係がどのように変化してきたかを振り返ります。チョムスキーらによる LLM 批判に代表される「嫌悪」の時代から、国際音韻論学会で「AI を活用した研究に関する特別セッション」が開催されるようになった現在まで。そのうえで、AI が研究不正を加速させる可能性について、私がおこなっている一連の実証実験をお話しします。p-hacking、外れ値の恣意的除去、査読論文の機密性の問題、そして日本語でガードレールが弱まるという発見まで。最後に、こうしたリスクへの対策として、事前登録制度の意義についても議論します。

ところで、皆さんは研究や仕事で AI を使っていますか？ 使っている方は、「これは便利だ」と思った経験と同時に、「ひやっとした」経験もお持ちではないでしょうか。AI に分析を任せたら変な結果が返ってきた、AI の間違った提案を鵜呑みにしそうになった、など。そういった体験を、ぜひ当日お聞かせください。「AI を使うべきか否か」に一般的な正解はありません。むしろ、皆さんそれぞれが経験を持ち寄っていただくことで、議論がより豊かになると思います。

◇プロフィール◇

川原繁人

慶應義塾大学言語文化研究所教授。マサチューセッツ大学大学院にて博士号(言語学)取得。ジョージア大学助教授、ラトガーズ大学助教授を経て現職。著書に『フリースタイル言語学』(大和書房)、『音声学者、娘とことばの不思議に飛び込む』(朝日出版社)、『言語学者、生成 AI を危ぶむ』(朝日新聞出版)、『友だち以上恋人未満の人工知能』(KADOKAWA)など。雑誌『科学』にて、生成 AI と研究倫理に関する論考を連載中。

折田奈甫

早稲田大学理工学術院英語教育センター准教授。メリーランド大学言語学科にて博士号(言語学)取得。専門は心理言語学・社会心理言語学。著書に『言語能力は人工知能で解明できるか』(岩波書店, 2025 年, 共編著)など。

<問合せ先>

一般財団法人ラボ国際交流センター 東京言語研究所 〒160-0023 新宿区西新宿 3-9-2
TEL: 03-6233-0631 E-mail: tokyogengo@labo-global.co.jp
公式サイト: <http://www.tokyo-gengo.gr.jp/>